



写真2 台風による風倒被害



写真3 当時の十勝三股の風景

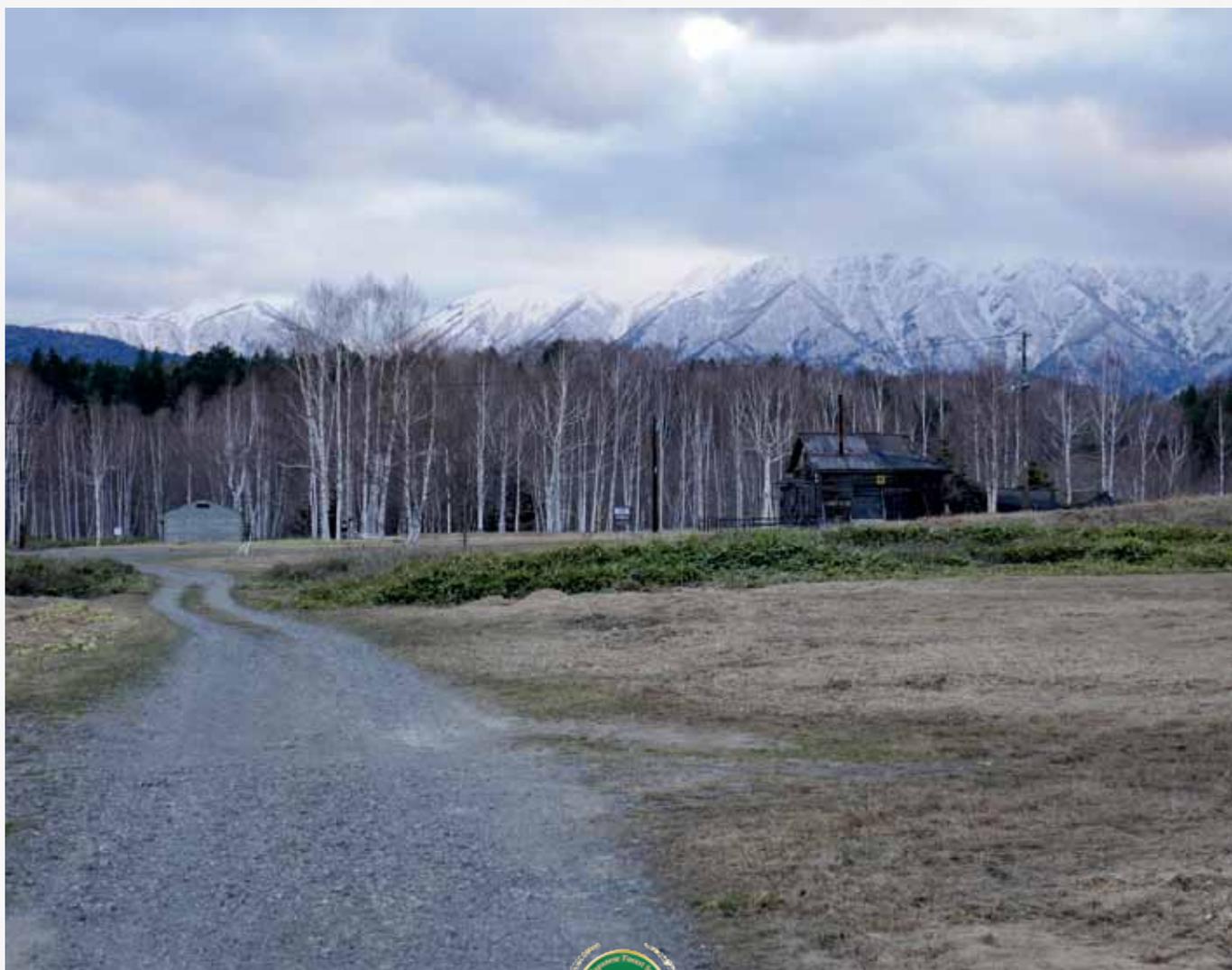


写真7 林業集落跡地から原生的山岳景観を望む



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう!

第 **20** 回 ^{みつまた} 十勝三股の林業集落跡地と森林景観

国立研究開発法人 森林総合研究所 ^{やまき かずしげ} 八巻 一成



写真1 三国峠から俯瞰した樹海景観



写真4 林業集落跡地の現況



写真5 森林鉄道の盛り土および土場跡



写真6 音更森林鉄道跡



写真8 残存する森林鉄道修理庫（遺産対象外）

北海道の屋根と言われる大雪山を源とする石狩川を上流へと分け入った先に、三国峠があります。この峠は文字通り、石狩、十勝、北見の3つの地域の分水嶺に当たります。石狩から十勝側へと向かう峠のトンネルを出ると眼下に見えるのが、わが国屈指の樹海景観が広がる三股盆地です（写真1）。人跡未踏と思われるような広大な樹海にかつて日本最大級の林業を主体とした集落が存在したとは俄かには思えない光景です。

三股盆地の原生林は1936（昭和11）年の暴風被害に加えて、北海道林業史上特筆すべき未曾有の風倒木被害を全道にもたらした1954（昭和29）年の洞爺丸台風によって、甚大な風倒被害を被りました（写真2）。帯広営林局管内における風倒被害の57

%（m当り）が、当地域を含む上士幌営林署管内で発生しましたが、風倒木を搬出するために大活躍したのが音更森林鉄道です。風倒木処理で急増した人口は、昭和20～30年代の最盛期にはおよそ1,500人に達しました。こうした当時の状況は、北海道における典型的な林業集落の様相を呈していた一方、林業を主体として成立した集落の跡地としては日本最大級の規模を誇っていたのです（写真3）。洞爺丸台風の風倒木処理が一段落した後は、伐採搬出事業・集落ともにその規模を急速に縮小させ、現在、十勝三股に居住する住民は僅か2世帯となつてしまいました（写真4）。

広大な集落跡地には森林鉄道や土場の跡が残り、往年の活況が偲ばれます（写真5）。また、森林鉄道跡（写真6）の先には伐木事業所跡が残ります。対象範囲の林分は明治期からの原生林伐採の影響を受けている一方、風倒木処理を伴う当時の森林施業の影響も強く受けており、風倒被害を受けた森林の推移を見るために設定された風倒被害地固定試験地は、その後の変化を知る上で重要なものとなっています。こうした林業集落跡地や当時の森林施業の強い影響下にある森林景観と、東大雪山の原生的な森林景観とがコントラストをなす様は、原生林の伐採とともに歩んできた北海道の開拓および林業の歴史を端的に示しており、自然と人為が対をなす特異な文化的景観でもあることから（写真7）、国有林約5,286haが「十勝三股の林業集落跡地と森林景観」として林業遺産に認定されました。

なお、集落跡の中心に残る森林鉄道修理庫は、林業集落の記憶を呼び起こすランドマークとなっています（写真8）。2017年初春の大雪で建物の半分が倒壊してしまいましたが、現在修理庫を所有する環境省の取り扱い方針がまだ未定のため、今回の遺産対象には含まれていません。こうした中、森林鉄道修理庫を地元之宝としてなんとか残せないかと、地元有志が保存活動に取り組んでいます。そんな一人、上士幌地域の宝探しの会事務局長の井上智彦氏は、「修理工場跡は」三股に人が暮らしていたことを知る唯一の生き証人。その価値を見直し、観光資源として活用していく意義は大きい」と語ります。十勝三股の林業集落跡が、地域の人々の宝であり続けて欲しいものです。